

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Usages of two-character Chinese-origin verbs defined as transitive / intransitive in Japanese dictionaries

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-12-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楊, 健, Yang, Jian メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2614

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



国語辞書において「自他両用」とされる二字漢語

サ変動詞の用法

楊 健

1. はじめに

現代日本語の動詞のうち、「割る・割れる」「始める・始まる」「流す・流れる」のようなかなりの割合の和語動詞については、他動詞と自動詞がペアになっているため、形態が自動詞か他動詞かを判断する手がかりとなりうる。これに対して、二字漢語サ変動詞の場合は、「勉強する」「存在する」「解散する」のように、「一する」という一つの形態しか持っていないため、形態的な自他判別の手がかりは基本的でない。日本語学習者にとっては、辞書の記述に頼ることが判断のほぼ唯一の手段であると考えられる。

和語動詞では「閉じる」「開く」「伴う」¹のような自動詞用法と他動詞用法を併せ持つ、いわゆる自他両用の動詞は少数に限られるが、漢語サ変動詞には自他両用²とされる動詞が数多く存在する。楊尙郎 (2009) では、国語辞書において「自他サ変」と分類されている二字漢語動詞の総数を、『岩波国語辞典』:411語、『学研現代新国語辞典』:587語、『明鏡国語辞典』:686語³のように示している。

さらに、動詞の自他の対応に厳密な定義を与えたのは奥津 (1967) である。奥津 (1967) によれば、自他対応関係を持つ動詞は (1) のような構文的な対応関係を持つ。

$$(1) \begin{array}{cccc} N_1 & ga & N_2 & o & V_1 \\ & & N_2 & ga & V_2 \end{array} \quad (4)$$

¹ 「目 {が/を} 閉じる」「扉 {が/を} 開く」「危険 {が/を} 伴う」。

² 「自他交替」「自他対応」と呼ぶ先行研究も見られる。

³ 楊尙郎 (2009: 75)。なお、国語辞書は『岩波国語辞典 第六版』、『明鏡国語辞典 携帯版』である。

⁴ 奥津 (1967: 49)。「両文の意義に或る同一性が保たれている場合、V₁とV₂との間に自・他の対応がある」としている。ちなみに、V₁が他動詞で、V₂が自動詞である。

本稿は以下の問いに答えることを目標とする。

- (I) 二字漢語サ変動詞が、国語辞書において「自他両用」とされることが、(1) の対応関係を持つこととはどのように関わるか。
- (II) (1) の対応関係を持たない動詞が国語辞書で「自他両用」と判断されることがある要因は何か。
- (III) (1) の対応関係を持つ動詞は単純な自他両用で、用法に偏りなどはないのか。

2. 先行研究

漢語サ変動詞の自他用法に関する研究としては、影山 (1996)、金英淑 (2004, 2006)、楊高郎 (2007, 2009) がその代表となる。

影山 (1996) は、自他両用動詞に関して、「他動詞をもとにして、そこから反使役化⁵によって自動詞が派生されているものと思われる」(p. 203) と主張し、他動詞を基本とする根拠を二つ挙げている。

一つ目は「自他両用動詞が何等かの使役主を含意していること」(p. 203) である。例えば、(2) のようなアスペクト的な意味を表す動詞は、「意図的な活動が対象となり、逆に、自然発生の事象はこれらの動詞で描写することができない」(p. 203) ということである。

- (2) a. 会議を終了する／会議が終了する
 a'. *梅雨を終了する／*梅雨が終了する
 b. 操作を継続する／操作が継続する
 b'. *伝染病を継続する／*伝染病が継続する

(影山 1996: 203)

二つ目は、「他動詞用法と自動詞用法では自動詞用法のほうに意味的・認知的制限が観察されること」(p. 203) である。例えば、

- (3) a. ナポレオンがフランス領土を拡大した。

⁵ 影山 (1996) の「概念構造における反使役化 (anti-causativization)」とは、

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT -z]]]
 →[x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT -z]]]

(影山 1996: 145)

「使役主 (x=y) が変化対象 (y) と同定され、意味的に束縛される。この操作を反使役化と名付ける。束縛を受けた使役主は対象物と同一物であることが意味構造で保証されるから、統語構造には現れない」(影山 1996: 145) ということである。

- a'. フランス領土が拡大した。
 - b. コピー機を使って、図面を拡大した。
 - b'. * (コピー機で) 図面が拡大した。
- (4)
- a. 水を分解すると水素と酸素に分かれる。
 - a'. 水が水素と酸素に分解した。
 - b. 時計をばらばらに分解した。
 - b'. ?*時計がばらばらに分解した。

(影山 1996: 203)

(3a) (3a')、(4a) (4a') から見れば、「拡大する」と「分解する」は (1) の対応関係をなしている自他両用の漢語サ変動詞である。しかし、(3b') (4b') のように、「拡大する」「分解する」の自動詞用法に制限が見られる。その制限の由来に関しては、影山 (1996) は「変化対象の自力ないし内在的コントロールが認められる場合だけ自立語が成り立っている」(p. 204) のように説明している。

金英淑 (2004, 2006) は、影山 (1996) の指摘に反論して、自他両用の漢語サ変動詞はすべて自動詞用法に制限があるわけではなく、以下のように、他動詞用法に制限が見られる動詞もあると指摘した。

- (5) a. イラクとの国交が回復した。
- b. ヨルダンがイラクとの国交を回復した。
- (6) a. 景気が回復した。
- b. * 経済学者が景気を回復した。
- (7) a. 患者の意識が回復した。
- b. * 医者が患者の意識を回復した。

(金英淑 2004: 91-92)

金英淑 (2004, 2006) は、他動詞文 (6b) (7b) に見られる制限を、「再帰的な関係」を用いて説明している。それは「主語と目的語には一定の所属関係が成立している」ということである。つまり、主語と目的語の間に、「再帰的な関係」が存在する場合のみ、他動詞文が成立するということがある。また、金英淑 (2004, 2006) は他動詞用法に制限が見られる漢語サ変動詞は自動詞から他動詞への派生方向を示していると指摘する。

金英淑 (2006) は、「再帰的な関係」について、「行為、あるいは変化の結果を被るイベントの範囲が主語に限られる性質であり、具体的には、目

的語が主語の身体部位や所有物、組織における上下関係のようなモノ名詞の場合、あるいは主語が携わるイベントのようなコト名詞の場合である」と規定している。

楊高郎 (2007) は、金英淑 (2004, 2006) で取り上げている「再帰的な関係」という概念に関して、その基準が曖昧であるという問題点を指摘し、次のような反例を挙げている。

- (8) a. 収入が半減した。
b. *太郎が収入を半減した。(太郎の収入)

(楊高郎 2007: 70)

(8b) では「太郎の収入」という「再帰的な関係」が成り立っているにも関わらず、他動詞文が成立しない。これは金英淑 (2004, 2006) による「再帰的な関係」に矛盾する例である。しかし、楊高郎 (2007) はその矛盾の原因について触れていない。

楊高郎 (2007) は、影山 (1996) 及び金英淑 (2004, 2006) に基づいて、自動詞と他動詞のどちらに制限が見られるかにより、自他派生の方向を判断するものである。結果として、自他両用の漢語サ変動詞を以下の三種類に分けている。

- (9) a. 自動詞から他動詞が派生される動詞: 「回復する」「半減する」「増加する」
b. 他動詞から自動詞が派生される動詞: 「解決する」「拡大する」「分解する」
c. 自動詞と他動詞が同等に働く動詞: 「停止する」「中断する」

(楊高郎 2007: 73)

楊高郎 (2009) は、『岩波国語辞典』、『学研現代新国語辞典』と『明鏡国語辞典』という三種類の国語辞書を利用し、三つの辞書における漢語サ変動詞の自他一致率を調べている。その結果は、「三つの国語辞典における自他両用の漢語サ変動詞は異なり語数 912 語であり、そのうち、三つの国語辞典において「自他サ変」として自他分類が一致している動詞は 269 語である。一方、自他の分類が国語辞典によってゆれている動詞は 643 語であり、自他の分類が一致している動詞は異なり語数からみると約 30%に過ぎない」(p. 78) と示されている。

さらに、自他分類がゆれている 643 語について、以下のように細分をしている。

- (10) a. 三つの国語辞典ともに自他分類が異なる動詞— 42 語
- b. 二つの国語辞典において自他分類が一致している動詞 (つまり、一つの国語辞典のみ自他分類が異なる動詞)— 464 語
- c. 一つ以上の国語辞典において品詞分類が「名詞」になっている語、または、その語自体が国語辞典に収録されていない動詞— 137 語

(楊高郎 2009: 80)

また、楊高郎 (2009) は、自他対応になる場合の漢語サ変動詞は、(11) のような「非対格構文 vs 対格構文」の対応関係をなすと指摘する。

- (11) a. Yが ~ する (自動詞文)

[非対格構文 vs 対格構文]

- b. Xが Yを ~ する (他動詞文)

(楊高郎 2009: 81)

さらに、自他分類がゆれている動詞の場合、(12) のような「非能格構文 vs 対格構文」の対応関係をなす傾向が見られると指摘している。

- (12) a. Xが ~ する (自動詞文)

[非能格構文 vs 対格構文]

- b. Xが Yを ~ する (他動詞文)

(楊高郎 2009: 81)

楊高郎 (2009) は、「国語辞典において自他両用の定義が曖昧であり、国語辞典によって漢語動詞の自他認定がゆれている」(p. 87) と述べている。漢語動詞の自他判別が難しい作業であり、国語辞書においてもゆれていることが分かる。

3. 研究対象と調査方法

影山 (1996)、金英淑 (2004, 2006)、楊高郎 (2007, 2009) の一連の先行研究は、自動詞用法と他動詞用法のどちらに制限が見られるかにより、自他

派生の方向を判断するものである。本稿では、二字漢語サ変動詞の使用実態に注目し、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)を用いて、自他両用の二字漢語サ変動詞の用法を分析する。本稿で扱う研究対象は、楊高郎(2009)で扱われた、三種の国語辞書で「自他サ変」と分類される269語であるが、269語のうち、BCCWJにおける例文数が10件以下のもの⁶50語を除いた219語である。BCCWJにおける実例⁷に基づいて、当該の語が自他両用動詞であるか否かを確認した上で、自他両用動詞の他動詞または自動詞としての用法に偏りが見られるか否かを観察する。

4. 自他両用動詞を判定する基準

本稿では、奥津(1967)が提唱した動詞の自他対応の判断基準に従う。奥津(1967)は、動詞の自他の対応に厳密な定義を与えた。その定義とは次のとおりである。

(13) 自・他の対応とは、次の二文

(i) N_1 ga N_2 o [+V, +Transitive, X, Y]

(ii) N_2 ga [+V, -Transitive, X', Y']

において、 $Y=Y'$ なる時、[+V, +Transitive, X, Y][+V, -Transitive, X', Y']で表される二動詞間の関係を言う。(但しX、X'は自・他の対立に伴って必然的に変化する主語、目的語に関する特徴、例えば主語や目的語が生物であるか、など。)

(奥津 1967: 50)

本稿では、(13)の構文的対応関係を自他両用動詞の判定の基準とする。漢語サ変動詞を「VNスル」と記し、漢語サ変動詞の自他を判定する基準を下記(14)のように規定する。

(14) N_1 ガ N_2 ヲ VNスル (他動詞)

N_2 ガ VNスル (自動詞)

(ただし、移動の経路や起点を表すヲ格の場合を自動詞とする)

⁶ BCCWJにおける例文数が少なすぎる時に、自他を判定するのが難しくなる場合があることによる。

⁷ BCCWJの中納言・短単位検索を使い、検索条件を以下のように設定する(「開始する」を例に):「キー - 語彙素 - 開始」、「後方共起1 - 語彙素読み - スル」。ちなみに、本稿の検索結果は2019年4月のものである。

本稿では、(14) の構文的な対応関係を持つ漢語サ変動詞を自他両用の漢語サ変動詞とし、このような対応関係を持つ構文を「対格構文 vs 非対格構文」と記す。

5. 自他両用動詞の選別結果

この節では、(14) の基準に従い、楊高郎 (2009) で三つの国語辞書において自他両用と判断された語 (219 個) を再分析する。分析した結果、国語辞書において「自他サ変」と判断される二字漢語サ変動詞には、以下の四つの種類があることがわかる。

5.1 「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係が成立する自他両用動詞

(14) のような、「対格構文 vs 非対格構文」の構文的な対応関係をなし、自動詞用法と他動詞用法が対応しているものは、本稿で扱う自他両用の漢語サ変動詞である。(14) の基準を満たした自他両用の漢語サ変動詞は計 186 語である。例えば⁸、

- (15) a. 環境問題を適正かつ円滑に解決し、よりよい環境を実現していくためには、行政的な対応や企業の努力のみならず、国民一人一人が環境に配慮した生活行動を心がけていくことが大切である。

『環境白書』

- b. 千九百四十五年になり、すべての問題が解決し、七月十六日に、アラモゴードの砂漠で最初の原爆実験が行われた。実験は成功し、準備はすべて完了したのである。

『アインシュタインの予言』

- c. 企業が問題を解決した (他動詞)
 問題が解決した (自動詞)

5.2 「対格構文 vs 非能格構文」の対応関係が成立する動詞

- (16) N₁ ガ N₂ ヲ VN スル
 N₁ ガ VN スル
 * N₂ ガ VN スル

⁸ 本稿で扱う例文はすべて「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ) から抽出した実例である。

(16) に示すような、「対格構文 vs 非能格構文」の対応関係が成立する語は、計 14 語である。「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係が成立しないため、本稿ではこれらの動詞を自他両用の漢語サ変動詞とせず、他動詞とする。その実例を以下に示す。

- (17) a. 睡眠の際にも、体全体が完全に水平にはならないありさまで、また不十分な格好で腰かけると、ものを飲食するのもままならなかった。

『暗黒魔王の陰謀』

b. *ものが飲食する

- c. 朝、人參果汁をコップ 3 杯飲み、昼は腹 5 分目、夜は普通に飲食して、ひと月に十キロ減量した結果、リバウンドがないというからお試しあれ。

『Yomiuri Weekly』

- (18) a. 『荒城の月』をはじめ、『箱根八里』や『散歩』など、数々の名作を作曲し、二十三歳の若さで夭折した瀧廉太郎 (千八百七十九~千九百三) は、多感な少年時代を竹田の城下町で過ごした。

『旅の手帖』

b. *名作が作曲する

- c. 英雄だと思っていたナポレオンのために作曲し、彼が皇帝志願だと分かって怒ったんですから、例えば、第三交響曲は《俗物》とでもつければよかったと思います。

『クラシック音楽自由自在』

(17a)(18a) は、「飲食する」「作曲する」の他動詞文である。それらに対応する非対格自動詞文の (17b) と (18b) は非文であるため、本稿で扱う自他両用の漢語サ変動詞ではない。これらの動詞では目的語 N₂が基本的に自明であるため、(17c) と (18c) に示すように、目的語 N₂(「飲食物を」「楽曲を」) が現れなくても文の意味が明白である。

- (19) a. 「さればお留守居役どの、天江吉兵衛どのは、いったいいかなる絵を修業しておられたのでございます」 佐多林蔵はほっと安堵し、今度は声を柔和にしてたずねた。

『火宅の坂』

b. *絵が修業する

- c. パリに本店のある国立と銀座の店で四年ほど修業し、フランスで研修中に父から物件が弘前に見つかったとの報告を受けた。
『ようこそ、フランス料理の街へ。』

- (20) a. 3年の受講者数は約五十四万人で、原付免許新規取得者のほとんどがこの講習を受講した。

『警察白書』

- b. *講習が受講する

- c. 昭和五十二年度における安全運転管理者に対する講習は、延べ千三百六十一回行われ、全受講対象者の九十六・三%に当たる十九万三千二十二人の安全運転管理者が受講した。

『警察白書』

(19a) (20a)は、漢語サ変動詞「修業する」「受講する」の他動詞文であり、それに対応する非対格自動詞文の(19b) (20b)は非文である。したがって、「修業する」「受講する」は本稿で扱う自他両用の漢語サ変動詞ではない。また、(19c) と (20c)に示すように、目的語 N₂(「料理を」、「講習を」)が現れないものの、前後の文脈から判明したり、主題化されていたりする。これらの動詞の目的語 N₂は基本的に必須補語となるため、現れない場合は、文脈から判明するものでなければならない。文脈を離れて「主語 N₁が修業した」「主語 N₁が受講した」と言う場合、「何を？」という「目的語 N₂」の情報に関する疑問が生じることがある。

5.3 ニ格を取る自動詞用法を併せ持つ動詞

(21) のように、ニ格を取る自動詞用法を持っているが、他動詞文に対応する非対格自動詞文「N₂がVNスル」が成立しないものは、本稿で扱う自他両用動詞ではない。この種の動詞は計8語である。

- (21) N₁ ガ N₂ ヲ VN スル
N₁ ガ N₂ ニ VN スル
* N₂ ガ VN スル

例えば、

- (22) a. なぜ、世界が日本の開国を注目していたのか、ということを明らかにするためには、当時十九世紀中葉における東アジアが、欧米列強の勢力拡大の焦点となっていた地域であるという、国

際的位置を考える必要がある。

『近代日本と国際社会』

b. *日本の開国が注目する

c. 人口の高齢化、家族構造の変化、女性の就労増加等の社会的変化は先進諸国共通の動きであり、互いに他国の状況を知り、意見や経験を交換することが重要である。このため、他の先進国の社会保障の動向に注目し、国際的な議論に積極的に参加していくなど、国際交流を深めていくこととしている。

『厚生白書』

(23) a. 地域の発展の拠点となる地方の中心都市を効率的に連絡し、地域相互の交流の円滑化に資するもの。

『建設白書』

b. ?地方の中心都市が連絡する⁹

c. なお、故障の場合は、緊急性を考慮して教育委員会を通さず、学校が直接納入業者に連絡し、修理を依頼しているケースがほとんどである。

『校長・教頭のための学校施設・事務管理百科』

(22a) (23a) は漢語サ変動詞「注目する」と「連絡する」の他動詞文である。それに対応する非対格自動詞文 (22b) (23b) は非文である。しかし、二格を取る自動詞文 (22c) と (23c) は成立する。これらは(14) の構文的な対応関係を持たないため、本稿で扱う自他両用の漢語サ変動詞ではない。

5.4 他動詞用法が実際に見られない動詞

この種の動詞は国語辞書において「自他サ変」と判定されているが、BCCWJにおいては他動詞文の実例が実際に見られず、自動詞用法だけを持つ。計 11 語である。例えば、

(24) ブッチの予測は、見事に当たった。ネルソン戦が開幕し、タイガーはスケールの大きな活躍を見せる。

『新帝王伝説』

(25) 運よくここに残った者たちも、家族が全滅したり、少なくとも家を焼かれなかった者はほとんどありませんでしたよ。

『美濃路殺人事件』

⁹ (23b)は(23a)に対応する非対格自動詞文の場合を指す。ちなみに、「連絡する」はト格を取る例文もあるが、本稿では自動詞用法として扱う。

国語辞書においては、漢語サ変動詞「開幕する」と「全滅する」の解釈は以下のようにになっている。

(26) 開幕する

《名・自他サ変》

①舞台の幕があいて演劇などが、始まること (始めること)。

②物事が始まること (始めること)。「オリンピックの—」

(『学研現代新国語辞典』(第六版): 237)

(27) 全滅する

《名・自他サ変》

全部ほろびること。「守備隊が一する」「冷害で農作物が一する」

「敵軍を一する」のような他動詞用法もまれに用いられるが、「全滅させる」の形が標準的¹⁰。

(『明鏡国語辞典』(第二版): 976)

国語辞書の記述からは、「開幕する」と「全滅する」は、自動詞としての意味も、他動詞としての意味も持っていることになる。しかし、本稿はBCCWJにおける使用実態に基づくという立場を取るゆえに、BCCWJにおいて実際に他動詞用法の実例が見られないこれらの動詞を自動詞とし、自他両用の漢語サ変動詞として扱わない。

以上、(14)の判断基準に従い、国語辞書において「自他両用」とされる二字漢語サ変動詞を再分析してみた。その結果、(14)に適う自他両用動詞でないものが含まれていることがわかった。「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係が成立する両用動詞、「対格構文 vs 非能格構文」の対応関係が成立する動詞、二格を取る自動詞用法を併せ持つ動詞、他動詞用法が実際に見られない動詞という四つの種類が存在する。「対格構文 vs 非対格構文」が成立する両用動詞を除き、他の3種類は本稿で扱う自他両用漢語サ変動詞の判定基準である(14)を満たさないため、考察の対象から外す。

上記四つの場合の漢語サ変動詞の語数を表1に示す。

¹⁰ BCCWJには「~を全滅する」の実例は見られなかったが、「~を全滅させる」は51例があった。

表1 国語辞書において「自他両用」とされる二字漢語動詞の選別結果

「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係が成立する自他両用動詞	186
「対格構文 vs 非能格構文」の対応関係が成立する動詞	14
二格を取る自動詞用法を併せ持つ動詞 ¹¹	8
ヲ格を取る他動詞用法が実際に見られない動詞	11
合計	219

表1に示す4種類の二字漢語サ変動詞を、森田(1994)が指摘した対になる自他動詞のパターンに合わせると、対応する場合が見られる。森田(1994)においては、日本語における自動詞と他動詞が対になる場合、以下の五つのパターンが挙げられている。

- (28) a. A ガ B ヲ 他動詞 / B ガ 自動詞
 私は財布を無くした / 財布が無くなった
- b. A ガ B ヲ 他動詞 / A(ニ) ハ B ガ 自動詞
 私は星を見る / 私(に)は星が見える
- c. A ガ B ヲ 他動詞 / B ガ A ニ 自動詞
 警察が泥棒をつかまえる / 泥棒が警察につかまる
- d. A ガ B ヲ 他動詞 / A ガ B ニ 自動詞
 私は大学を受ける / 私は大学に受かる
- e. A ガ B ヲ 他動詞 / A ガ 自動詞
 月が庭を照らす / 月が照る

(森田 1994: 158-160)

森田(1994)は、(28)に示す五つのパターンに和語動詞の例しか挙げていない。和語動詞の場合は、自動詞と他動詞とはペアになっているため、形態から自他を判断することができる。しかし、漢語サ変動詞の場合は、形態的な対応関係が見られないため、構文的な対応関係から判断することがほぼ唯一の手段である。「対格構文 vs 非能格構文」の対応関係が成立する漢語動詞と、二格を取る自動詞用法を併せ持つ漢語動詞は自動詞文が作れる。しかし、(14)の「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係が成立しないため、本稿で扱うところの自他両用ではない。「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係をなす自他両用の漢語サ変動詞は、和語動詞の場合の(28a)に相当する。

¹¹「注目、配慮、反論、反駁、憤慨、連絡、加熱、固執」計8語。

6. 自他両用動詞の用法の偏り

前節では国語辞書において自他両用とされる二字漢語サ変動詞の四つの種類について考察した。この節では、本稿で扱う「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係が成立する自他両用の漢語サ変動詞 (計 186 語) に注目し、これらの漢語サ変動詞の自動詞用法と他動詞用法に偏りが見られるか否かを調べる。

本稿では、「~-o VN-su (-ru)」「~-ga VN-su (-ru)」「VN-sa-se (-ru)」「VN-sa-re (-ru)」という四つの項目を設定し、各々の用例数を比較することで、自他両用動詞の用法の偏りを判定する。

自他両用の漢語サ変動詞「VN スル」が使われる構文から見ると、「~-o VN-su (-ru)」は他動詞文であり、「~-ga VN-su (-ru)」は自動詞文である。また、「VN-sa-se (-ru)」は「自動詞+ -se (-ru)」と「他動詞+ -se (-ru)」に分けられ、「VN-sa-re (-ru)」は「自動詞+ -re (-ru)」と「他動詞+ -re (-ru)」に分けられる。さらに、受身文の性質により、「他動詞+ -re (-ru)」には「直接受身」と「間接受身」の 2 種類がある。

漢語サ変動詞「停止する」¹²を例として、各パターンを表 2 に示す。

表 2 自他両用の漢語サ変動詞「VN スル」の構文パターン

~-o VN-su (-ru)	<u>他動詞</u>	太郎がエンジンを <u>停止</u> した。	①
~-ga VN-su (-ru)	<u>自動詞</u>	エンジンが <u>停止</u> した。	②
VN-sa-se (-ru)	<u>自動詞+ -se (-ru)</u>	太郎がエンジンを <u>停止</u> させた。	③
	<u>他動詞+ -se (-ru)</u>	花子が太郎にエンジンを <u>停止</u> させた。	④
VN-sa-re (-ru)	<u>自動詞+ -re (-ru)</u>	花子はエンジンに <u>停止</u> されて困っている。	⑤
	<u>他動詞+ -re (-ru)</u> (直接)	エンジンが (太郎によって) <u>停止</u> された。	⑥
	<u>他動詞+ -re (-ru)</u> (間接)	花子は太郎にエンジンを <u>停止</u> されて困っている。	⑦

¹² 楊高郎 (2007) は「停止する」を自動詞と他動詞が同等に働く動詞としている。表 2 の①-④の例文、⑥は楊高郎 (2007) からの引用 (括弧筆者) で、⑤⑦は筆者の作例である。

自他両用の漢語サ変動詞「VN スル」の自動詞用法と他動詞用法の偏りを判定するにあたり、表 2 の各パターンに基づいて、以下の四つの比較項目を立てる。

- 項目 A: 自動詞用法 ②+⑤
 項目 B: 他動詞用法 ①+④+⑦
 項目 C: 「自動詞+ -se (-ru)」 ③
 項目 D: 「他動詞+ -re (-ru)」 ⑥

その理由は以下のとおりである。

- 項目 A: 「VN スル」が自動詞として使われる場合の用例数
 項目 B: 「VN スル」が他動詞として使われる場合の用例数
 項目 C: 「自動詞+ -se (-ru)」と他動詞の用例数との比較。

自動詞、他動詞と使役との関係について、青木 (1977) は、「使役とは二重の他動であって、自動詞に「す」「せる」「させる」をつけたものは他動の意味を表わし、使役にはならない」(p.108) という時枝説に対して疑問を唱え、「対立する他動詞をもつすべての自動詞が所謂使役態をもたぬならば、自動詞使役態が他動詞と等価値なるが故として、時枝説を裏付けることにもなろうが、実際には対立他動詞があってもなお所謂使役態の成立するものの方が多く…」(p.108)¹³ と指摘している。

また、早津 (2016) は、「サ変動詞の中には、他動詞としても自動詞としても使われる、あるいは自他が安定していないもの」が、「それらの動詞を用いて対象に対する働きかけを表す文を作ろうとするとき、その動詞を他動詞とみなせば「～ヲ V」とし、自動詞だとみなせば「-(サ)セル」をつけて「～ヲ V-(サ)セル」とすることになる」(p.258) と述べている。これらをふまえ、本稿では自他両用の漢語サ変動詞について、「VN スル」が他動詞として使われた用例数と、「自動詞+ -se (-ru)」の形で使われた用例数とを比較する。

- 項目 D: 「他動詞+ -re (-ru)」と自動詞の用例数との比較。

自動詞、他動詞と受身(動詞)との関係について、野村 (1982) は、(29)のような構文論的な並立関係を示し、「N₁中心の他動詞グループに対して、N₂中心の自動詞と受身動詞が並行して対応している」(p.143) と主張して

¹³ 青木 (1977) は「学生を集める / 学生を集まらせる」「水を一度に流す / 溝を掘って水を流れさせる」などの例を示し、「直接作用と間接作用の違い」と説明したが、本稿では他動詞と「自動詞+ -se (-ru)」との違いについては触れない。

いる。

- (29) a. N_1 が N_2 を V_t N_2 が V_i
 b. N_1 が N_2 を V_t N_2 が (N_1 に) V_p
 (V_i 自動詞 V_t 他動詞 V_p 受身動詞)

(野村 1982: 143)

野村 (1982) により、対応する自動詞を持たない他動詞の場合、受身動詞は自動詞的対応項を補っているが、自他の対応を持つある種の他動詞の場合は、自動詞だけでなく、受身動詞も対応するということである。例えば、「穴をあける」における他動詞「あける」には、自動詞「あく」(「穴があく」)も、受身動詞「あけられる」(「穴があけられる」)も対応しているということである。

野村 (1982) からは、受身動詞の「 N_2 が (N_1 に) V_p 」構文と自動詞文「 N_2 が V_i 」とは並行して他動詞文「 N_1 が N_2 を V_t 」と対応していることが分かる。しかし、並立関係をなしているとはいえ、受身動詞の「 N_2 が (N_1 に) V_p 」構文がすべて自動詞文「 N_2 が V_i 」の穴埋めの役割を果たしているとは言えない。受身動詞の構文では補語「(N_1 に)」が増えており、動作主の存在が感じさせられ、自動詞の場合とは異なる意味が生じると考えられる。「 N_2 が (N_1 に) V_p 」構文の意味を明らかにすることが必要となるが、別の機会に譲りたい。

自他両用の漢語サ変動詞の場合、他動詞「 \sim -o VN-su (-ru)」に対応するものとして、自動詞「 \sim -ga VN-su (-ru)」と、受身動詞の「他動詞+ -re (-ru)」形があり、並立関係をなしている。そこで、本稿では自他両用の漢語サ変動詞の「他動詞+ -re (-ru)」形と自動詞の用例数を比較項目の一つとする。

6.1 他動詞用法に偏る自他両用動詞

「 $B/(A+B)$ 」を計算し、「VN スル」が他動詞として使われる比率 (他動詞の使用率) を調べる。BCCWJにおける例文総数は1000以上あるが、そこから他動詞の使用率が60%以上のものを選び¹⁴、他動詞の比率の上位7語を表3に示す。

¹⁴ この節での60%の使用率、及び1000以上の用例総数の設定は、自動詞専用と他動詞専用の傾向を示す両用動詞を厳選した数のバランスを考慮した上での結果である。

表3 他動詞用法に偏る自他両用動詞 (BCCWJにおける例文総数 1000 以上)

語	合計	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	B/(A+B)%
開始	4166	180	2812	8	1166	94.0%
破壊	1755	69	1014	10	662	93.6%
反映	3454	356	1721	483	894	82.9%
解消	1542	323	844	30	345	72.3%
確立	2553	603	1318	55	577	68.6%
展開	4472	1119	2162	100	1091	65.9%
実現	5092	1642	2581	371	498	61.1%

「開始する」「破壊する」に関しては、他動詞の使用率「B/(A+B)%」はそれぞれ 94.0%と 93.6%であり、他動詞の使用が自動詞より優勢になっていることが分かる (B>A)。同時に、項目 D「他動詞+ -re (-ru)」の数が項目 A「自動詞」の数よりも遥かに多い (D>A)。他動詞の使用が優勢になっているため、項目 C「自動詞+ -se (-ru)」の用例数は非常に少ない。したがって、「開始する」と「破壊する」は自動詞としての用法は劣勢になりつつあり、他動詞の用法が優勢になっている。漢語サ変動詞「開始する」「破壊する」は他動詞専用の傾向が見られると言える。

「反映する」に関しては、「B/(A+B)%」の結果は 82.9%であり、他動詞と自動詞の使用上に大きな差が見られる。同時に、項目 D「他動詞+ -re (-ru)」の数が項目 A「自動詞」の数よりも多い (D>A)。ここからは、「反映する」は他動詞の使用が優勢になっていることが分かる。しかし、「開始する」「破壊する」と違って、項目 C「自動詞+ -se (-ru)」の用例数は非常に多い。自動詞の使用が完全に劣勢になっているわけではない。したがって、他動詞専用の傾向が見られるとは言えない。

「解消する」に関しては、「B/(A+B)%」の結果は 72.3%であり、他動詞と自動詞の使用上にある程度の差が見られる。しかし、項目 D「他動詞+ -re (-ru)」と項目 A「自動詞」との差がわずかしかない。「開始する」「破壊する」のような大きな差が見られないため、他動詞専用の傾向にあるとは言いがたい。

「確立する」「展開する」「実現する」に関しては、他動詞の使用率「B/(A+B)%」の結果は 60%あまりで、「開始する」「破壊する」のように大きな差を示していない。自動詞と他動詞の使用上に大きな差が見られな

い。また、項目 A「自動詞」の数が項目 D「他動詞+ -re (-ru)」の数より多い (A>D)。これらの動詞は、自動詞の使用が劣勢になっているわけではない。それに、「展開する」と「実現する」は「自動詞+ -se (-ru)」の用例数も多く存在している。したがって、これらの動詞は他動詞専用の傾向にあるとは言えない。

「反映する」「解消する」「確立する」「展開する」「実現する」の五つの語は自他の使用に偏りがあることが分かる。しかし、「開始する」「破壊する」のような他動詞専用の傾向を示すものとは異なる。

「開始する」「破壊する」以外に、自動詞の使用が劣勢、他動詞の使用が優勢になりつつある、つまり、他動詞専用の傾向が見られる動詞¹⁵を表 4 に示す。

表 4 他動詞用法に偏る自他両用動詞 (BCCWJ における例文総数 1000 以下)

語	合計	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	B/(A+B)%
樹立	351	9	268	9	65	96.8%
再現	814	38	585	16	175	93.9%
羅列	70	4	51	1	14	92.7%
再任	42	2	14	1	25	87.5%
一新	142	19	85	5	33	81.7%

表 4 に示すように、漢語サ変動詞「樹立する」「再現する」「羅列する」「再任する」「一新する」は他動詞の使用率がすべて 80%以上である。それと同時に、項目 D「他動詞+ -re (-ru)」の数は項目 A「自動詞」の数より多い (D>A)。それに、項目 C「自動詞+ -se (-ru)」の数は非常に少ない。これらの自他両用の二字漢語サ変動詞は他動詞専用の傾向にある動詞である。「開始する」と「破壊する」と合わせて、計 7 語となる。

6.2 自動詞用法に偏る自他両用動詞

「A/(A+B)」を計算し、「VN スル」が自動詞として使われる比率 (自動詞の使用率) を調べる。自動詞の使用率が 60%以上で、BCCWJ における例文総数が 1000 以上のものを選び、自動詞の比率の上位 7 語を表 5 に示す。

¹⁵ 他動詞の使用率が 80%以上であり、「他動詞+ -re (-ru)」の数が「自動詞」の数より多い語である。つまり、「B>A」「D>A」という二つの条件が揃う場合である。

表 5 自動詞用法に偏る自他両用動詞 (BCCWJ における例文総数 1000 以上)

語	合計	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	A/(A+B)%
減少	4762	4375	42	342	3	99.0%
消滅	1284	1142	14	128	0	98.8%
増加	7015	6520	102	377	16	98.5%
発生	8007	7432	146	427	2	98.1%
増大	1694	1380	59	252	3	95.9%
復活	1116	762	53	282	19	93.5%
乾燥	1141	672	55	402	12	92.4%

表 3 と違って、表 5 に示す 7 語には共通の特徴が見られる。自動詞の使用率「 $A/(A+B)\%$ 」はすべて 90%以上になっているため、自動詞の用例数が他動詞の用例数を大幅に超えている ($A>B$)。それと同時に、項目 C「自動詞+ -se (-ru)」の数は項目 B「他動詞」の数よりも多い ($C>B$)。それに、「他動詞+ -re (-ru)」の用例数も極めて少ない。したがって、これらの語は他動詞の使用が劣勢、自動詞の使用が優勢になりつつある。つまり、自動詞専用の傾向が見られる両用動詞といえる。

表 5 と同じように、BCCWJ における例文総数が 1000 以下の自動詞専用の傾向を示す自他両用の漢語サ変動詞を表 6 に示す¹⁶。

¹⁶ 自動詞の使用率が 80%以上であり、「自動詞+ -se (-ru)」の数が「他動詞」の数よりも多い語である。つまり、「 $A>B$ 」「 $C>B$ 」という二つの条件が揃う場合である。

表 6 自動詞用法に偏る自他両用動詞 (BCCWJにおける例文総数 1000 以下)

語	合計	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	A/(A+B) %
生育	237	226	1	10	0	99.6%
収縮	296	224	1	71	0	99.6%
孵化	107	88	1	18	0	98.9%
点滅	205	164	2	39	0	98.8%
昇格	259	196	5	53	5	97.5%
転倒	282	255	7	19	1	97.3%
転移	163	146	4	8	5	97.3%
腐食	50	35	1	10	4	97.2%
存続	519	385	15	115	4	96.3%
増殖	362	296	15	44	7	95.2%
一変	506	386	21	97	2	94.8%
収斂	100	68	5	8	19	94.5%
半減	275	228	17	26	4	93.1%
稼働	266	190	14	59	3	93.1%
集結	232	182	15	31	4	92.9%
絶滅	270	215	18	34	3	92.3%
連合	62	50	5	6	1	90.9%
逆転	493	349	39	65	40	89.9%
反転	244	163	20	58	3	89.1%
収束	119	90	11	14	4	89.1%
高揚	221	138	18	59	6	88.5%
倍增	215	153	23	35	4	86.9%
移動	3637	2604	489	523	21	84.2%
転覆	103	62	13	24	4	82.7%
伸展	39	19	4	12	4	82.6%
降格	51	28	6	9	8	82.4%

自動詞専用の傾向が見られる自他両用の二字漢語サ変動詞は表 5 と表 6 をあわせて、計 33 語である。それに対して、表 3 と表 4 に示す他動詞専用の傾向が見られる自他両用の二字漢語サ変動詞は 7 語にとどまる。現代日本語において、自他両用の漢語サ変動詞に関して、自動詞専用になる傾向が優勢であることが分かる。

永澤 (2007) は、歴史的な観点から、コーパス¹⁷を用いて、近代から現代に至る漢語動詞の自他体系の変化及びそれを引き起こす要因について考察した。その結果、「近代の自他体系のうち、現代までに変化が見られるのは、自他両用動詞の一部に限られ、その方向性として、自他両用から自動詞専用化するもの、他動詞専用化するものの2系列がある」(p. 26) ということが判明し、その2系列のうち、自動詞専用化が優勢になっていることも明らかになったと述べている。

本稿は、通時的な考察を行ったわけではないが、現代日本語の書き言葉を研究対象としている。現代日本語においても、近代から現代への変化と同様に、自他両用の漢語サ変動詞は自動詞専用の傾向が優勢になっている。

その原因として、永澤 (2007) は、「漢語動詞においても和語と同様に自他を分化させる方向へ力が働いた結果だ」(p. 25) と指摘し、日本語において、接辞「一させる」による「他動詞化」が可能である一方で、「自動詞化」を可能とするような接辞が日本語にはない」(p. 25)¹⁸ としている。

本稿では、自動詞専用の傾向を示す自他両用の漢語サ変動詞を選別する際に、最初から、項目 C「自動詞+*-se (-ru)*」と項目 B「他動詞」の数を比較するという条件 (C>B) を設定している。永澤 (2007) において自動詞専用化の原因として扱われた条件を、本稿では自動詞専用の傾向になった結果の一つとして扱っている¹⁹。

池上 (1981) は、日本語には事態を表現する時に、「スル表現」より「ナル表現」²⁰を好む傾向があると指摘している。自他両用の漢語サ変動詞の

¹⁷ 近代日本語のコーパス『太陽コーパス』、朝日新聞記事データベース『聞蔵 (きくぞう)』、朝日新聞社サイト『asahi.com』など。

¹⁸ 永澤 (2007) は、受身の接辞「一される」に関して、「自動詞化」に近い機能を持っているが、必ず背後に動作主の存在を感じさせるため、下記のような自動詞用法に代わることはできない場合があると指摘する。

- (i) 風が吹き、風車が回転した/*回転された。
- (ii) 気温が上がり、花粉の飛散地域が拡大した/*拡大された。

(永澤 2007: 25)

ただし、「?回転される」はそもそも受身として使いにくく、「回転させられる」の方が自然と思われる。

¹⁹ 永澤 (2007) は、近代語の自他両用漢語動詞について、現代語への変化の一つとして「自律性の高い事象を表す場合には他動詞用法が存立しにくくなった」(p. 26) ことを挙げている。しかしながら、これに従えば、逆に自律性の低い事象と、「[略] 他からの人為的なはたらきかけを受けずとも成立し得る変化を表す場合に、自他両用動詞として存立できる」(永澤 2007: 21、下線筆者) の下線部とは両立しないと考えられ、表「(22)」の「(e) 自他両用」(永澤 2007: 22) の動詞がどのような条件の下に存立しているのか不明である。

²⁰ 紙幅の関係で、本稿では「スル表現」と「ナル表現」については詳しく説明しない。

中から、自動詞専用の傾向にある動詞を選別しやすいのは、「ナル表現」を好む傾向がある日本語の特徴と一致しているとも考えられる。

7. 自他両用の漢語サ変動詞の語彙概念構造

前節では自動詞専用の傾向を示す自他両用の漢語サ変動詞 33 語、他動詞専用の傾向を示す自他両用の漢語サ変動詞 7 語を選出した。この節では、自動詞専用の傾向、他動詞専用の傾向が見られる理由について探ってみる。影山 (1996) は、自他両用の漢語サ変動詞の語彙概念構造について、(30)の構造をもっていると述べている。

(30) [x CONTROL [y BECOME [y BE AT z]]]
(影山 1996: 159)

影山 (1996) は、(30) の概念構造において、「使役主 (x) と変化対象 (y) が同一であるときには自動詞用法が、別物であるときには他動詞用法が得られる」(p. 159) として、「上位事象 (使役作用) と下位事象 (変化結果)」(p. 159) という二つの事象を合わせている。(実際に使用された) 個々の動詞では、上位事象と下位事象のうち、いずれかの事象に意味的な重点が置かれているということである。影山 (1996) は、「結果よりむしろ動作主の在り方や使役の様態・手段に重点を置く動詞はもっぱら他動詞として機能し、他方、使役様態よりむしろ状態変化の結果に重点を置くような動詞は能格動詞として自動詞にも使える」(p. 159-160) ととらえている。

また、影山 (1996) は、動詞が「自動詞として機能するか他動詞として機能するかは、恣意的に決まっているのではなく、意味的な要素によって定められている」(p. 202) と述べ、「実世界において原型的、典型的な状況がどのように認識されているか」(p. 202) は重要な基準の一つであると主張している。「消滅する」「減少する」といった自動詞専用の傾向を示す二字漢語サ変動詞は、自然に起こる事態を描写するのが典型的である (下位事象、変化結果を表すのに重点が置かれている) と考えられるが、「開始する」「破壊する」といった他動詞専用の傾向を示す二字漢語サ変動詞は、他によって引き起こされる他動的な事態を描写するのが典型的である (上位事象、使役作用を表すのに重点が置かれている) と考えられる。話し手の中で、各動詞の描写する典型的な事態が異なるという認識のため、自他両用の漢語サ変動詞は自動詞用法専用や他動詞用法専用になるものと見られる。

8. まとめ

本稿では、国語辞書において自他両用とされる二字漢語サ変動詞に注目し、それらの用法について考察した。その結果、以下の3点が明らかになった。

(I) 国語辞書において「自他両用」と判定される二字漢語サ変動詞がすべて (1) のような「対格構文 vs 非対格構文」という対応関係をなしているわけではない。

(II) 「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係が成立しない動詞には、「対格構文 vs 非能格構文」の対応関係が成立する動詞、二格を取る自動詞用法を併せ持つ動詞、ヲ格を取る他動詞用法が実際に見られない動詞が含まれている。

(III) 「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係が成立する自他両用の二字漢語サ変動詞の中には、「自他両用」とはいえ、自動詞専用の傾向にあるもの（「消滅する」「減少する」「増加する」など）も存在し、他動詞専用の傾向が見られるもの（「開始する」「破壊する」など）も存在する。このような傾向を示す理由は、個々の自他両用の漢語動詞の描写する典型的な事態の違いにあると考えられる。自動詞専用の傾向を示す動詞は自然に起こる事象を典型的に描写し、変化結果を表しやすい。それに対して、他動詞専用の傾向を示す動詞は他によって引き起こされる他動的な事態を典型的に描写し、使役作用を表しやすい。

本稿では、コーパスの実例に基づき、自動詞専用の傾向、他動詞専用の傾向を示す自他両用の二字漢語サ変動詞を選別したが、それらの動詞に使用上の特徴や制限などが見られるか否か、そして、その制限を影山 (1996) の「反使役化」や金 (2004, 2006) の「再帰性」で十分に説明できるか否かについて、今後の課題として考察する必要がある。

参考文献

青木伶子(1977)「使役—自動詞・他動詞との関わりについて」『成蹊国文』

10号: 須賀・早津編(1995)に収録, pp. 108-121

池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学』大修館書店

奥津敬一郎(1967)「自動化・他動化および両極化転形—自・他動詞の対応」

『国語学』70号, pp. 46-66

影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版

金英淑(2004)「VNする」の自他交替と再帰性」『日本語文法』4巻2号,

pp. 89-102

- 金英淑(2006)『「VN する」の自他交替と構造-現代日本語の漢語動詞の分析』筑波大学博士学位論文
- 須賀一好・早津恵美子編(1995)『動詞の自他』ひつじ書房
- 永澤濟(2007)「漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化」『日本語の研究』3巻4号, pp. 17-32
- 野村剛史(1982)「自動・他動・受身動詞について」『日本語・日本文化』11号, 大阪外国語大学: 須賀・早津編(1995)に収録, pp. 137-150
- 早津恵美子(2016)『現代日本語の使役文』ひつじ書房
- 森田良行(1994)『動詞の意味論的文法研究』明治書院
- 楊高郎(2007)「自動詞・他動詞用法に意味的制限を持つ自他両用動詞について—二字漢語動詞を中心に」『筑波日本語研究』12号, pp. 65-88
- 楊高郎(2009)「国語辞典における自他認定について: 自他両用の二字漢語動詞を中心に」『筑波日本語研究』14号, pp. 75-95

国語辞典

- 『学研現代新国語辞典』(第六版) 学研プラス
- 『明鏡国語辞典』(第二版) 大修館書店

謝辞

本稿の執筆にあたり、ご指導を賜りました福田嘉一郎先生、有益なコメントとご意見を頂きました下地早智子先生に心から感謝申し上げます。また、本稿は2019年第20回日本語文法学会での口頭発表を修正し、加筆したものです。会場の方々から貴重なご意見を賜りましたことに深く感謝いたします。最後に、査読の先生方より、懇切なご指示とご意見を賜りましたことに深く感謝し、お礼を申し上げます。

国語辞書において「自他両用」とされる二字漢語

サ変動詞の用法

楊 健

神戸市外国語大学

要旨

本稿は国語辞書において「自他両用」とされる二字漢語サ変動詞に注目し、それらの動詞がすべて「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係をなしているか否かを確認するものである。その結果「自他両用」には、「対格構文 vs 非能格構文」の対応関係が成立する動詞、二格を取る自動詞用法を併せ持つ動詞、ヲ格を取る他動詞用法が実際に見られない動詞という3種類の動詞も含まれていることが確認できた。また、「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係をなす二字漢語サ変動詞には、自他の使用上に偏りの見られるものがあることが判明した。さらには、自動詞専用の傾向を示すもの（「消滅」「減少」「増加」など）、他動詞専用の傾向を示すもの（「開始」「破壊」など）も存在する。このような傾向は、個々の自他両用の漢語動詞が描写する典型的な事態の違いにより生じるものと考えられる。

キーワード: 漢語動詞 サ変動詞 自他両用 自動詞 他動詞